

DIY の多様性をめぐる一考察

—英米および日本における関連研究の比較から—

目白大学 溝尻 真也

1. 目的

DIY (Do It Yourself) は、家の建築・修繕から、手芸、園芸、自動車改造、ZINE 制作など、自分で身近なものを作り出す営み全般を示す言葉として用いられている。この DIY は日本でも 1950 年代から広がり始めるが、日本における DIY は日曜大工という言葉と結びつきながら、特に家庭空間の装飾や家庭内で使用する実用品を制作する、主に男性による趣味として認識されてきた。

本研究は、各国における DIY をめぐる様相の違いを整理しつつ、日本においてこの営みにどのような意味が付与されてきたかを明らかにするものである。この作業を通して、家庭内における趣味としてのものづくりを考察するための枠組みについて検討したい。

2. 方法

本研究は、以下の 3 段階に分けて実施する。(1) 海外の DIY 関連研究を整理し、これまで DIY という営みに対してどのようなアプローチで研究が行われてきたかを検討する。(2) 日本における DIY およびその隣接領域の研究を整理し、日本の DIY 研究の視座が、海外の研究とどのように共通し、またどのように異なっているかを検討する。(3) 2 を踏まえつつ、日本において DIY はどのような営みとして理解され、またそれが歴史的にどのように変化してきたかについて、関連する趣味雑誌や新聞記事等をたどりながら明らかにする。

3. 結果

研究の結果、以下の 3 点が明らかになった。(1) 英米を中心に、DIY 研究は社会学、住居学、デザイン史、マーケティングなどをまたいで学際的に展開しており、その知見も、メディア、家族、ジェンダー、物質文化などが重なり合う多様なものであった。(2) 日本において DIY を対象とした研究は限られているが、社会学、建築学、ジェンダー論、余暇学等に重なる問題系として整理できることが明らかになった。(3) 日本では住宅事情やジェンダー観、そして余暇に対する問題関心を背景に、海外とは異なる形で DIY に対する認識が形成されてきた。一方で、日本の DIY 市場はアメリカ的消費文化をモデルに成立してきた側面もあり、海外の DIY 文化に向けられたまなざしと日本特有の社会背景とが複雑に交錯する中で生成・変容してきたのが、日本の DIY であったことが分かった。

4. 結論

米英をはじめとする諸外国において、DIY は多様な意味を持つ営みであり、ゆえに幅広い研究が積み重ねられてきた。一方日本では、狭い意味での家庭内における男性のものづくり趣味を指すことが多く、これを対象とした研究も比較的限定されてきた。しかしこのような DIY に対する認識自体、家庭内における男性のものづくり趣味が日本社会でどのような位置を占めてきたかを表しているとも考えられる。手芸に代表される家庭内における女性のものづくり趣味や、海外の研究で提示された知見等とも比較しながら、日本の DIY の位置づけについて詳細に検討することは、延いては趣味としてのものづくりが浮かび上がらせる日本社会のありようを記述することにもつながるのではないだろうか。

主要参考文献

Goldstein, Carolyn M., 1998, *Do It Yourself: Home Improvement in 20th-century America*, Washington D.C.: National Bulding Museum.

加藤秀俊, 1960, 「ホーム・ドライバーと日曜大工」『中央公論』75(6), 1960.6, 中央公論社.